

パンチョ・ビヤのチワワ戦線復帰

ウエルタと国内外の政権支持者はコアウイラとソノラでの反乱をある程度予測していた。この二つの州はマデロ革命で重要な役割を果たした。チワワに関してはゴンザレスが消された後、オロスコの連邦軍が革命軍に壊滅的な打撃を与えた。何か事が起きてもチワワから隣接する二州へ討伐隊を派遣すれば、容易に反乱は鎮圧できると考えていた。しかし僅か数週間後この期待は見事に裏切られ、再びチワワは革命の中心となった。¹⁷

1913年3月、ナミキパ村議会は1905年クレエル土地法により奪われた土地を分割して村人に返す決議案を採決した。チワワとドゥランゴのあちこちで、マデロ革命では静であった地区からも激しい叛乱の火の手があがった。これ等を纏め上げるためにはパンチョ・ビヤのようなカリスマ的な力が必要であった。投獄前のビヤにはイデオロギーのかけらも見られなかった。獄中における体験はビヤの視野を広げ、ウエルタ、テラサス、クレエルによって固められた社会組織への憎しみを募らせていた。ビヤは革命に勝利するためには、チワワやドゥランゴで、あるいはメキシコ全土で、連邦軍とアシエンダの持ち主を抹殺する必要があると気付いた。以前ビヤは自分の兵士の事しか考えず、土地改革などにはあまり関心を持っていなかった。獄中知り合ったサパティスタの理論家ヒルダルド・マガーニャ、同じくアブラアム・マルチネスはビヤを啓蒙した。しかしそれ以上に影響を与えたのは農民指導者トリビオ・オルテガとカリスト・コントゥレラスであった。ビヤは獄中、読み書きを習ったとする多くの伝記作家に対し、フリードリッヒ・カッツは異論を唱えている。彼の稚拙な文字で綴られたマデロへの手紙から判断して、読み書きの基本は既に出来ていたという。当時担当した判事はビヤにアレキサンドル・デュマの三銃士を、マガーニャはメキシコの歴史書を貸したと言われている。¹⁸

ゴンザレスの死を知りビヤのウエルタに対する憎しみは更に深まった。そして自分が速やかにチワワに帰ることが叶わず、孤独を感じていた。そうした1913年3月の初め、ウエルタを大統領と認めないと宣言したソノラ知事ホセ・マリア・マイトレナがアリゾナ州チューサンに住んでいることを耳にし、ビヤはマイトレナに援助を仰ぐことにした。チューサンに到着したビヤはソノラの革命指導者で後にカランサが暗殺されてから臨時大統領に就任するアドルフォ・デ・ラ・ウエルタの訪問を受け、ソノラで革命に加わることを勧められた。ビヤはその気になり、マイトレナに面会したときには、ソノラ軍に加わる覚悟を決めていた。マイトレナは予想に反し、ビヤにチワワへ帰って戦うことを勧め、彼に千ドルを渡した。マイトレナの金でホテル代を支払い、九丁のライフルを買い、九頭の馬を借り、3月6日の夜、ビヤは八人の部下と共にリオグランデを渡りメキシコに入った。彼等は一人当たり五百発の銃弾、二ポンドのコーヒーと砂糖、一ポンドの塩を携帯していた。¹⁹

1910年、マデロのために銃を取り、二年後オロスコと戦った元教師マヌエル・チャオは、2月24日、志願兵からなる一大隊を指揮してサンタ・バルバラの町を攻撃した。連邦守備兵は数で圧倒されたばかりか、住民からも一斉射撃を受けた。守備隊はチャオ軍に投降した。このような蜂起が各地で発生した。連邦軍の援軍が来ると彼らは山中に隠れ、ゲリラ戦を展開した。そのほかにもマクロビオ・エレラ、トリビオ・オルテガらは執拗に連邦軍を襲い、ビヤの古い同僚トマス・ウルピナはドゥランゴからチワワへ侵入してヒメネスの町を占領した。僅か二月の間にこれ等のリーダーたちはチワワにおける戦闘の様相を一変させていた。ドゥランゴでもカリスト・コントゥレラスが勢力をにぎった。ビヤが戻っても、もとのリーダーたちはビヤに寄り付こうとはしなかった。僅か、もとビヤの将校であったフィデル・アピラなどが加わったのみであった。彼等はビヤの助け無しで連邦軍を撃退していたし、ビヤより多い兵を率いていた。そしてビヤが帰還してからも、彼より多くの戦果をあげていた。²⁰

1913年9月、チワワの殆どの反乱指導者は独立の気運が高く、最高指揮官がビヤであろうと誰であろうと、人の指揮下にはいることを拒んだ。しかし僅か二三ヶ月後、彼等はビヤをチワワ革命軍の最高指揮官に選んだ。ビヤを北部師団長と呼んで、彼のもとに従うようになったのは、ほんの少し前には考えられないことであった。その主な理由は、ビヤの人気の高まりと彼の強さにあった。ビヤがチワワで行ったロビンフッドまがいの社会正義がチワワの大衆に受けたのである。メキシコに帰ってから数日後ビヤはテラススのアシエンダの一つ、エル・カルメンと呼ぶ農園を占領した。そこで働く農奴たちは管理人をひどく憎んでいた。ビヤは管理人と助手を皆の前で処刑し、穀物蔵を開放し大量の食糧をペオンに分配した。彼は皆の前で演説し、このような扱いに対して二度と屈服してはならないと説き、分配を取り仕切る係りを選出させた。ビヤはサウシトにあるサン・ロレンゾやラス・アニマス農場でも同じ事を行い、ビバ・ビヤの歓声はますます大きくなっていった。また、ビヤは山賊を徹底的に取り締まった。²¹

ビヤの人気の高まると共に志願兵を募るのは容易になったが、武器弾薬の調達が問題であった。ビヤは銀を運ぶ列車を襲い、それを元手に武器を購入した。当時米国は武器の輸出禁止令を布いていたため、簡単にはいかなかった。アメリカの武器商人は熱心に売り込み、時には密輸の手助けもした。女子供を含む数百人のメキシコ人が密輸に加担した。カートリッジ千個で八ドル、五十から百個の少量を運ぶときは一個辺り二セントを支払った。ウイルソン大統領はウエルタ政権に反対であり、革命軍への武器輸出の取り締りは手ぬるく、初めは小規模であったものが、密輸は次第に元のマデロ支持者の知識人たちによる組織された大掛かりなものになっていった。²²

帰還から僅か三ヶ月、七百人になったビヤ軍には有能な軍人も加わった。その三週間後、トリビオ・オルテガが五百人を連れてビヤの下に加わった。1913年6月、ビヤがはじめて重要な町ヌエバス・カサス・グランデスを占領した時には、チャオは既にずっと大きい町パラルを支配下に置いていた。ビヤはヌエバス・カサス・グランデスを長くは持ちこ

たえられなかった。最初の重要な勝利はサン・アンドレスの確保と、八月にジェネラル・フェリス・テラッサの千三百人からなる政府軍を破ったことであった。しかし、それすらも六月にウルピナ軍が多勢の連邦軍分遣隊で守られていたドゥランゴ州都を襲って奪取したのに比べれば小さな勝利であった。²³

1913年7月、連邦軍は反撃に出た。パスクアル・オロスコは連邦軍が支配するトレオンから千人の部隊をチワワ市へ移動して防衛隊を補強した。そのためにはチャオ、ロサリオ・エルナンデス、トゥリニダド・ロドリゲスが支配するチワワ南部を通る必要があった。革命軍は数の上では優っていたが、オロスコ軍は二年前に比べ、更に強力になっていた。オロスコはエルナンデスをカマルゴで破り、マブラでは百七十人の革命軍兵士が戦死した。7月11日、憲政軍の補給列車を襲い、マヌエル・チャオとトゥリニダド・ロドリゲス両軍をサンタ・ロサリオで破る大勝利を収め、三日後オロスコは意気揚々とチワワ市に入った。8月13日、チワワのアシエンダは反革命のために動員令を出し、各農園から十名ずつの兵士を集めて組織した分遣隊で連邦軍を補強することになった。このような状況に対応するためには、チワワとドゥランゴの革命指導者たちは結束する以外に道はないことを知らされた。総指揮官が誰になるのか予め決まっていたわけではなかった。カランサはマヌエル・チャオを押しした。しかし、彼等はカランサを革命の第一人者と認めてはいたものの、カランサの一存で決められることを好まなかった。中流家庭の出で教師であったチャオは、ピヤの人気に勝てるとは思わず、引き下がった。²⁴

17. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P203
18. Ibid. P204
19. Ibid. P206
20. Ibid. P207
21. Ibid. P209
22. Ibid. P212
23. Ibid. P213
24. Ibid. P213